

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1995年度

榛原町文化財調査概要 18

1997

榛原町教育委員会

# 榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1995年度

榛原町文化財調査概要 18

1997

榛原町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡榛原町内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要18）である。
- 2 調査は、平成7年度（1995年度）国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成7年11月30日に着手し、平成8年3月31日に終了した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。
- 5 各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

# 目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要 .....	1
II 位置と環境 .....	5
1 地理的環境 .....	
2 歴史的環境 .....	
III 須井南遺跡発掘調査概要 .....	7
1 調査の契機と経過 .....	
2 位置と環境 .....	
3 遺跡の調査 .....	
4 まとめ .....	
5 抄録 .....	
IV 沢遺跡第5次発掘調査概要 .....	13
1 調査の契機と経過 .....	
2 位置と環境 .....	
3 遺跡の調査 .....	
4 まとめ .....	
5 抄録 .....	

## I 埋蔵文化財発掘調査の概要

棟原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為とともに埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は年々増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、事業者等とその都度、協議を重ねているところである。1995年度（平成7年度）に棟原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、発掘届・通知等は表1のとおりである。また、1995年度（平成7年度）に実施した発掘調査等は表2・図1のとおりである。なお、本書には国庫補助事業・県費補助事業として実施した額井南遺跡、沢遺跡の2遺跡の発掘調査概要を収録している。

表1 1995年度発掘届等一覧表

摘要 種別	遺跡名	所在地	原因	原因者	面積	措置等
遺跡有無確認踏査願	萩原孤ブカ遺跡	棟原町萩原	宅地造成工事	三晃住宅㈱	44,920m <sup>2</sup>	1991年発掘調査済、他には遺跡なし
発掘調査届・通知	母里遺跡	棟原町母里	農地造成工事	福住和彦	545m <sup>2</sup>	立会調査、遺構・遺物なし
	雨師遺跡群	棟原町雨師	農地造成工事等	棟原町	2ha	発掘調査
	長者屋敷遺跡	棟原町笠間	林道開設工事	棟原町	5,000m <sup>2</sup>	事業中止
	丹切遺跡	棟原町萩原	宅地造成工事	カタヨシ	494m <sup>2</sup>	立会調査、遺構なし、土師器片出土
	額井南遺跡	棟原町額井	宅地造成工事	服部肇	114m <sup>2</sup>	発掘調査、本書所収
	沢遺跡	棟原町沢	個人倉庫等建設工事	菊田喜佐雄	1,026m <sup>2</sup>	発掘調査、本書所収
	丹切遺跡	棟原町下井足	個人住宅建設工事	松本雅生	60m <sup>2</sup>	立会調査、遺構・遺物なし
	高塚遺跡	棟原町高塚	上水道建設工事	棟原町	55m <sup>2</sup>	立会調査、遺構・遺物なし
	母里遺跡	棟原町母里	農地造成工事	新美代子	431m <sup>2</sup>	立会調査、遺構・遺物なし
	沢遺跡	棟原町沢	上水道建設工事	棟原町	91m <sup>2</sup>	立会調査、遺構・遺物なし

表2 1995(平成7)年度発掘調査第一緊要

番号	調査地名	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因 (原因者)	調査概要		遺跡概要	備考
							遺構	遺物		
1	発掘調査 1-87 1-88 15-B-1 (未登載)	井之谷遺跡 群 (西宮幼稚園)	橋原町下井 足 154,157地	1995.5.8~ 1995.11.13	1150	方墳(磯野石室) (海源井之谷作成土 地区適切組合)	サスカイト、石器、 瓦生土器、土灰、ビフー 器、角形器、月差、陶器 鉢、鉢、鏡、五輪塔、 トイゴ羽目貝	共生時代～中世 の遺物散布地・ 古墳時代～飛鳥 時代の古墳群、 中世の墳墓	1996年度継続 調査	
2	発掘調査 (未登載)	前原東遺跡	橋原町雨野 200	1995.8.22~ 1995.9.22	55	地域景観測量点 施設建設工事 (橋原町)	サスカイト、石器、 土器、古式土器 器、瓦器、新津 土器、瓦器	共生 時代～古墳 時代・中世の遺 物散布地	本報告	
3	発掘調査 (未登載)	前原西遺跡	橋原町西野 213、403-1, 404-1	1995.9.1 1996.1.12	54	水田区雨野 施設建設工事 (橋原町)	サスカイト、土 器、瓦器、瓦器	中世の遺物散布 地	本報告	
4	発掘調査 3-5 (未登載)	新井南遺跡	橋原町新井 436-1	1995.12.12~ 1995.12.26	8	個人農業用倉庫 設工事 (福野 業)	サスカイト 須恵器、土 器、瓦器、瓦器 瓦器、磁器、鐵 器、鐵	绳文時代～古墳 時代・中世の遺 物散布地	本報告	
5	発掘調査 2-544 103-51	沢遺跡 (5次調査)	橋原町沢 978-1	1996.1.23~ 1996.3.29	215	埋葬、ビット、漆、 土坑 個人住宅及び倉庫 設工事 (猪出喜生雄)	绳文土器、石斧、 石器、瓦器、瓦器 土器耳瓶、石瓶、 土器、土器、土器 土器、瓦器、瓦器、 瓦器、瓦器	绳文時代～中世 の遺物散布地・ 集落跡	本報告	
6	立会調査 2-485 15-D-184	母里遺跡	橋原町母里 352-1, 353-1	1995.5.24	1	農地造成工事 (植田和彦)	(盛土)	なし	なし	立会調査
7	立会調査 1-38 15-B-8	丹切遺跡	橋原町藤原 元板原 530	1995.10.30	1	宅地造成工事 (カタヨシ)		なし	なし	立会調査
8	立会調査 2-355 15-B-129	高原遺跡	橋原町高原 479-1	1996.3.1	1	上水道布設工事 (橋原町)		なし	なし	立会調査
9	立会調査 2-485 15-D-184	母里遺跡	橋原町母里 479-1	1996.3.26	1	農地形状変更工事 (新美代子)	(盛土)	なし	なし	立会調査

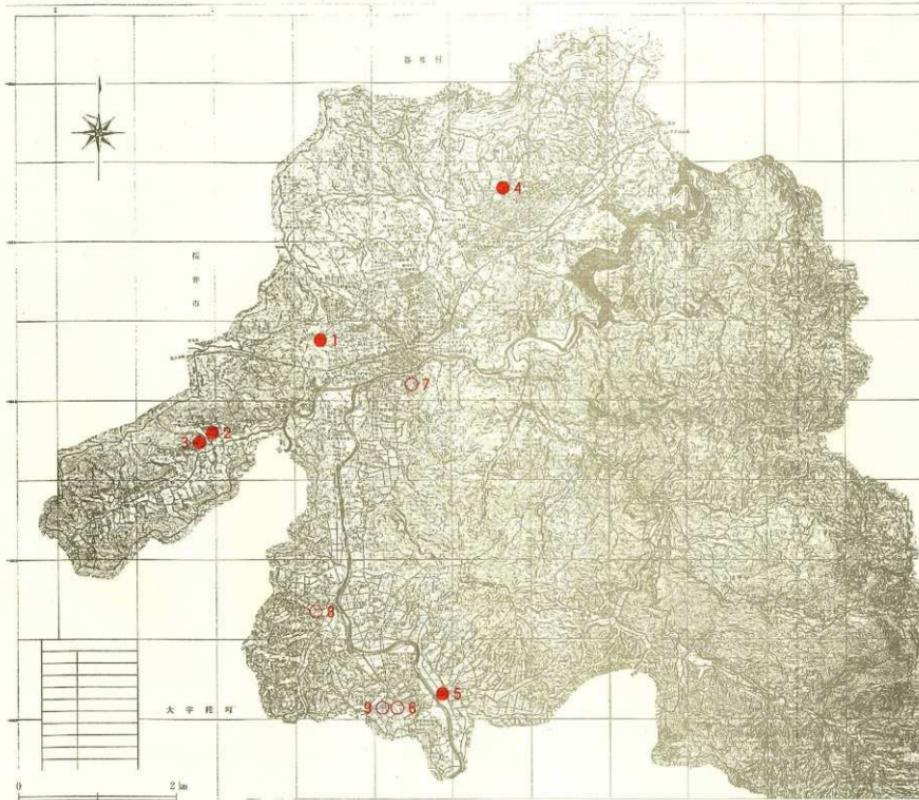


図1 1995年度調査遺跡跡位置図

## II 位 置 と 環 境

### 1 地 理 的 環 境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも総称され、大字宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大字宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

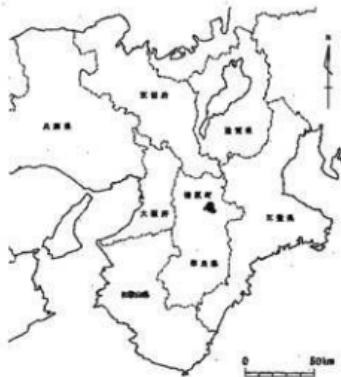


図2 榛原町位置図

### 2 歴 史 的 環 境

宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では3点の有舌尖頭器が出土しており、うち、2点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文草創期に求めることができ、こ

の頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峰遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峰中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畠古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の密度があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峰古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、谷畠中世墓地、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

(参考文献等省略)

### III 頼井南遺跡発掘調査概要

#### 1 調査の契機と経過

##### (1) 調査の契機と経過

頼井南遺跡は、1986年度（昭和61年度）の分布調査によって確認した遺跡で（図3）、中世の遺物散布地として『株原町遺跡分布地図』にも登載（株原町遺跡地図番号1-5）しているところである。この遺物散布地内において、個人による農業用倉庫建設工事が計画され、1995年11月には土地所有者から埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取り扱い・調査方法等を協議した結果、株原町教育委員会が発掘調査を担当することとなった。発掘調査は、遺構・遺物の状況を把握する試掘調査を行いその状況によっては、改めて本調査を実施することとした。現地調査は、1995年12月12日から12月26日まで断続的に実施した。なお、遺跡名は、大字名の「頼井」と小字名の「南」から「頼井南遺跡」とした。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 株原町教育委員会

調査担当課 株原町教育委員会 社会教育課

調査担当者 株原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、南信子

調査作業員 小林まり子、中谷喜代子、菅原春栄

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

調査協力 服部 肇



図3 頼井南遺跡位置図

## (2) 現地調査日誌抄

1995年（平成7年）

12月12日(火)

トレンチ設定。第1層～第2層掘り下げ。

12月20日(水)

第4層掘り下げ。地山面検出。写真撮影。

12月13日(水)

第3層掘り下げ。

12月22日(木)

土層断面図・平板測量図作成。

12月18日(月)

第3層掘り下げ。

12月26日(木)

トレンチ埋め戻し。

12月19日(火)

第4層掘り下げ。

## 2 位 置 と 環 境

額井南遺跡は奈良県宇陀郡樫原町大字額井に位置し、当地の高峰のひとつである額井岳の山裾の標高約372m～389mの尾根斜面や谷部分に立地する。遺跡の南方は、以前の大規模開発によって未調査のまま改変され、遺跡の分布状況等は不明な点が多いが、西方には赤瀬古墳群（6世紀後葉の横穴式石室墳2基）、赤瀬城跡（中世山城）、赤瀬遺跡（縄文時代～中世の遺物散布地）等の遺跡が分布する（図4、図版1・2）。



図4 額井南遺跡調査対象地位置図

### 3 遺跡の調査

#### (1) 調査区と基本土層

既存の仮設建物の関係上、小規模なトレンチ（南北約4m、東西約2m）を事業予定地の北西隅部分において設定した（図5、図版3）。基本層序は、第1層が暗褐色の耕作土、第2層が黒褐色の床土、第3層が暗褐色土、第4層が黒褐色粘質土、第5層が褐色粘質土の地山となっている（図6）。第4層は後述の遺物が出土している中世の遺物包含層（厚さ約40～50cm）である。なお、地表から地山面までの深さは約120～140cmである。

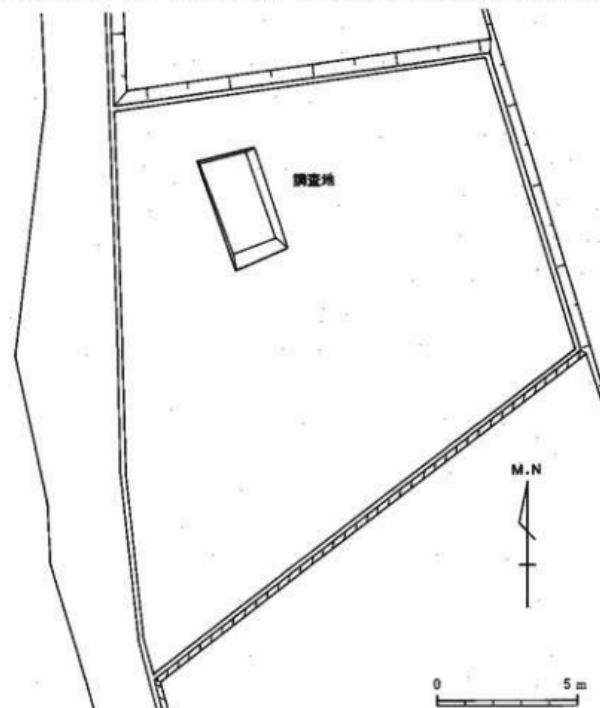


図5 須井南遺跡調査位置図

- L=380m
- 1 暗褐色土(耕作土)(10YR 3/3)-1層
  - 2 黒褐色土(床土)(10YR 3/2)-2層
  - 3 黒褐色粘質土(10YR 2/3)
  - 4 暗褐色土(10YR 3/4)-3層
  - 5 黒褐色粘質土(10YR 2/2)-4層
  - 6 褐色粘質土(地山)(7.5YR 4/4)

（土色名は「新版 標準土色誌」1987  
年度による）

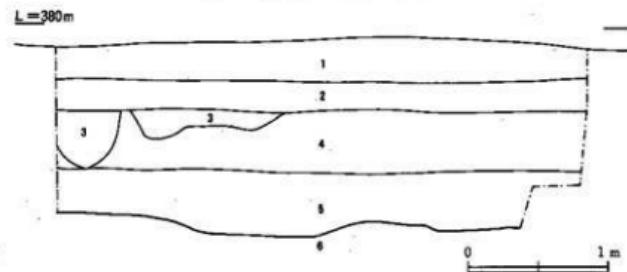


図6 須井南遺跡土層断面図

## (2) 検出遺構

発掘調査面積が限られたことにもよるが、明確な遺構は認められない。

## (3) 出土遺物

第1～4層の各層から遺物が出土している。なかでも第4層からの出土量が多く、須恵器(甕)、土師器(皿、土釜)、瓦器(椀、皿)、瓦質土器(擂鉢)、陶器、磁器、鉄滓、サヌカイト片が出土している。第1層～3層は先述の遺物の他、鉄釘、銭貨(寛永通寶)が認められる。

土器は細片が多く、図示したものは8点(図7、表3)であるが、実数はいま少し増加する。土師器皿の形態は個体ごとに差異がある。いずれも成形調整の主体は、口縁部上位内外面を断続的な横ナデ、見込み部分は不整方向のナデ、外面は口縁部中位から底部にかけて指頭圧を施す。瓦器椀(6)には内外面とも横方向の暗文を施し、(7)、(8)の見込み部分には平行線状暗文が認められる。これらは松本編年の井戸-39上層期～土坑-01下層期に比定でき、11世紀後葉から12世紀前葉のものと考えられる。この他、図示し得なかつたが、須恵器甕は6世紀後葉のものである。

鉄釘は第3層から6点(図8)が出土した。これらの詳細は表4にまとめているが、いずれも鋒化が著しい。

銅製寛永通寶(図9)は第1層から出土した。いわゆる正字文の新寛永銭で、径25mm、方孔長7mmである。方孔は円形に摩滅しており、転用が考えられる。

表3 額井南遺跡出土土器一覧表

掲図番号	種類	復元口径(cm)	器高(cm) (現存高)	色調	出土層	備考
7-1	土師器 皿	11.0	(2.1)	淡黄色	第3層	白色系
7-2	土師器 皿	8.4	1.2	にぶい褐色	第4層	
7-3	土師器 皿	11.0	1.5	にぶい黄褐色	第4層	いわゆる「て」字状口縁
7-4	土師器 皿	11.4	1.5	橙色	第4層	
7-5	土師器 皿	12.6	(3.3)	淡黄色	第4層	白色系
7-6	瓦器 楼	15.2	(3.4)	灰色	第4層	
7-7	瓦器 楼	高台 5.8	(1.6)	灰色	第4層	平行線状暗文
7-8	瓦器 楼	高台 5.4	(2.0)	黒褐色	第4層	平行線状暗文

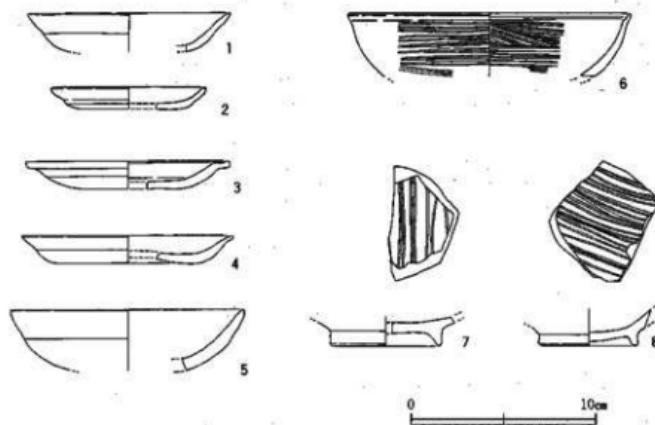


図7 頼井南遺跡出土土器実測図

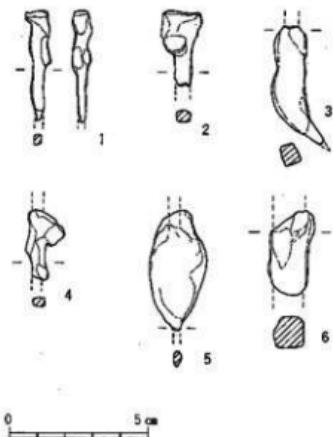


図8 頼井南遺跡出土鉄釘実測図

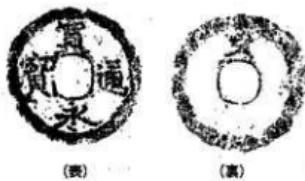


図9 頼井南遺跡出土銭貨拓影 (実物大)

表4 額井南遺跡鉄製品一覧表

挿図番号	種類	現存長(cm)	身部(cm)	備考
8-1	鉄釘	4.0	0.4×0.3	頭部形態は折り返し
8-2	鉄釘	2.7	0.5×0.5	頭部形態は折り返し
8-3	鉄釘	4.6	0.6×0.6	
8-4	鉄釘	2.5	0.3×0.4	
8-5	鉄釘	4.3	0.4×0.3	
8-6	鉄釘	3.0	1.1×1.1	

## 4 まとめ

額井南遺跡は、今回の発掘調査によって縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地であることが明らかとなったが、遺構の状況等は不明な点も多い。調査地東方には、寺院跡との伝承がある畠があり、本遺跡は中世寺院及び集落跡とも考えられるが、これらの確認等は今後の課題である。

## 5 抄 錄

遺跡名	額井南遺跡（奈良県遺跡地図番号：未登載、榛原町遺跡地図番号：1-5）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字額井436-1番地（小字名：南）
遺跡立地	標高約372m～389mの尾根斜面・谷部分
遺跡規模	南北：約150m、東西：約200m
種別	縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地
調査主体	榛原町教育委員会
調査原因	個人の農業用倉庫建設工事（事業主体：服部謹）
現地調査期間	1995年12月12日～1995年12月26日
調査面積	8m <sup>2</sup>
検出遺構	なし
検出遺物	サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、鉄釘、鉄滓、錢貨（寛永通寶）
	－整理箱1箱－
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 松本洋明他『十六面・菟王寺遺跡』 奈良県榛原考古学研究所 1988

## IV 沢遺跡第5次発掘調査概要

### 1 調査の契機と経過

#### (1) 調査史抄

沢遺跡は奈良県宇陀郡櫛原町大字沢に位置し、現状は大半が畠地、一部が宅地や道路となっている（図10・11）。この遺跡は、1955年（昭和30年）の町道拡幅工事に伴って包含層が検出（地下約0.5～0.7m）され、ここから多くの遺物が出土したことによって、その存在が知られるようになった。その後、遺跡北端の畠地から水田へと下る畦畔で縄文時代後期前葉の深鉢が出土したことから、1963年（昭和38年）には、網干善教・小泉俊夫氏らによって小規模な発掘調査（第1次調査）が実施されている。この発掘調査での基本層序は、第1層が耕作土（約30cm）、第2層が褐色粘土層（約50～70cm）、第3層が弥生土器や石包丁を含む砂利層（約20～30cm）や縄文土器を含む黒色粘土層（約20～30cm）、第4層が無遺物の黄灰色砂利層となっている。遺物出土状況等から遺跡の中心は、調



図10 沢遺跡位置図

査地の南東部分と推定されている。

1987年（昭和62年）には、農林水産省の農地造成事業に伴って遺跡の東方と西方の2箇所にトレーナーを設定（第2次調査）しているが、弥生時代後期～中世の土器片が少量出土したのみで、明確な遺構は検出されていない。

株原町教育委員会では、1991年（平成3年）に個人住宅建設工事に伴う発掘調査（第3次調査）を実施し、若干の中近世の遺構・遺物を検出している。1992年（平成4年）には個人農業用倉庫建設工事に伴う発掘調査（第4次調査）を実施し、中世を中心とする遺構・遺物を検出している（図11）。

また、遺跡西側の低地において1987年（昭和62年）に株原町教育委員会が試掘調査、1991年（平成3年）に奈良県立橿原考古学研究所が立会調査を実施しているが、いずれも芳野川の氾濫原である砂利層を検出しているにすぎない。

## （2）調査の契機と経過

遺跡中央部より、やや西寄りの標高約332m～333mの畠地において、個人住宅及び倉庫が建設されることとなり、1995年12月には埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取り扱い・

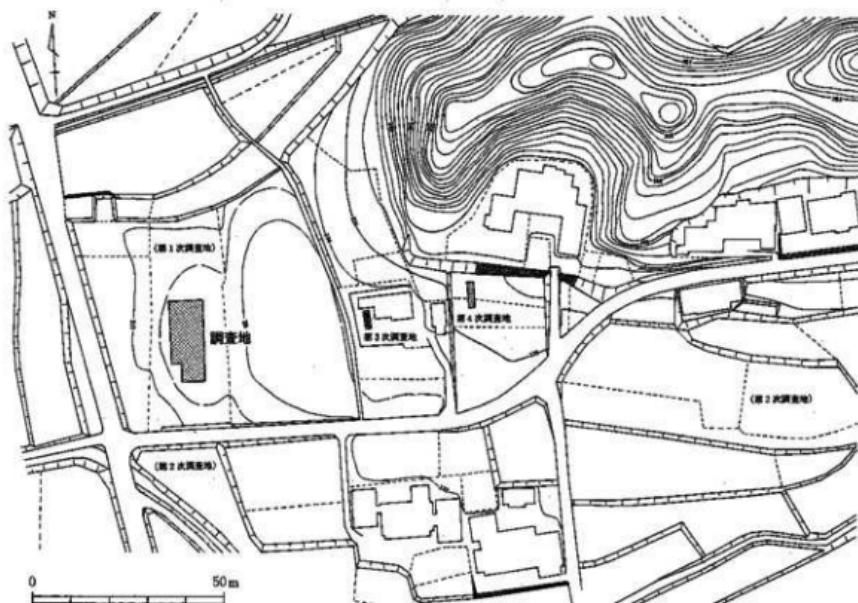


図11 沢遺跡調査位置図

調査の実施方法等について協議を行った結果、榛原町教育委員会が発掘調査を担当することとなった。現地調査は、事務手続を経たのち、1996年1月23日から1996年3月29日にかけて実施し、整理作業等は次年度から行うこととした（調査日誌抄は省略）。

なお、今回の調査地（第5次）は、第1次調査地の南隣にあたる。

調査関係者（1995年度～1996年度）は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会
調査担当課	榛原町教育委員会 社会教育課
調査担当者	榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員	井上好美、山本美恵子、南信子、北岡紀子、吉田説子、巽典子、福井大輔、岡祐二、奥野信子
調査作業員	田中昇、太田政信、中尾一二、樺原美智子、岡野イエ、坂本貞子、樺原栄子、田中京子、北中美代子、柳澤雅子、小林まり子、菅原春栄、中谷喜代子
航空写真撮影	日本テクノ株式会社
基準点測量等	日本テクノ株式会社
調査指導	奈良県教育委員会 文化財保存課、奈良県立樺原考古学研究所、小泉俊夫
調査協力	菊田喜佐雄、山本国雄、龍美建設、大和弥生文化の会

## 2 位置と環境

沢遺跡は芳野川東岸の標高331.5～335.5mの台地状の畠地に位置し、現在の芳野川からは約150～300mの距離をはかる。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっている。地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約1～2m高くなっている畠地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部が控え、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる（図10）。

沢の谷川を挟んで南約200mの尾根上には弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末～後期初頭の古墳、中世の建物遺構（寺院跡？）などが確認されている延命寺遺跡、約400m東方には绳文晩期～弥生時代前期・中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡、さらに東方には古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が確認されている。

## 3 遺跡の調査

### (1) 遺跡の層序

今回の調査地は、遺跡の中心よりやや西寄りの畠地で、そのほぼ中央に長さ25m、幅7mのトレンチを設定し、遺構・遺物の検出状況から西側へその一部を拡張している(図11)。調査区の北半と南半とでは、基本層序が大きく異なり、北半では弥生時代後期、縄文時代後期の包含層が明瞭に認められるのに対し、南半では弥生時代後期までの砂の堆積が著しい。北半での基本土層は1層が耕作土、2層が床土、3層が暗褐色土、4層が暗灰黄色土・黒褐色粘質土等、5層が灰黄褐色土・黒色粘質土等となっている。3層～4層が縄文時代遺物を含む弥生時代遺物包含層、5層が縄文時代後期の遺物包含層となっている(図12・13)。

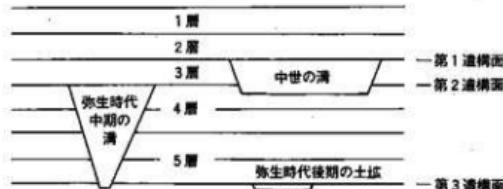


図12 沢遺跡土層断面模式図

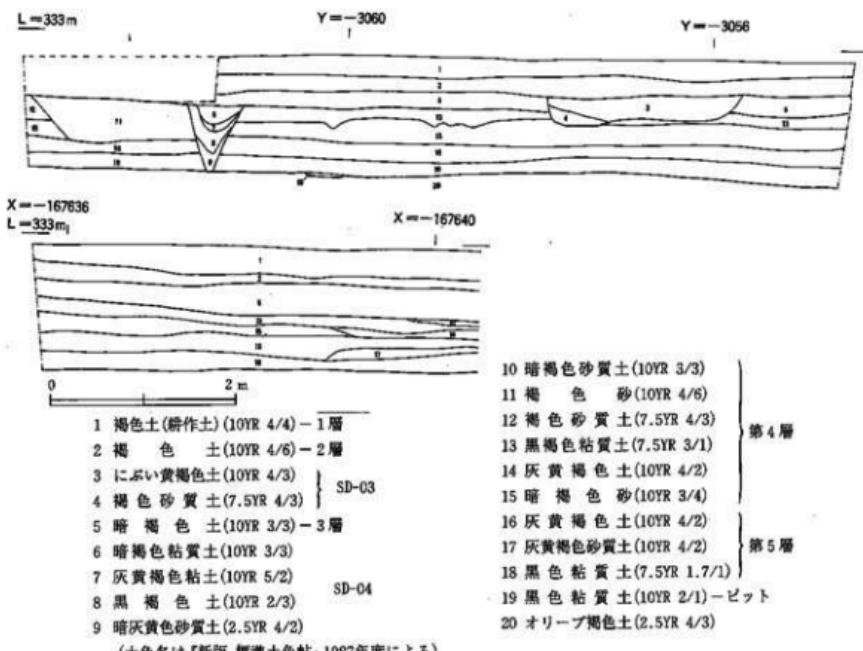


図13 沢遺跡土層断面実測図

## (2) 検出遺構

### ①中世の遺構(図14、図版6)

第1遺構面において検出した南北方向の3条の溝(SD-01~03)である。SD-01は延長約18m、幅約0.4~0.7mで、南北の両端はいずれも調査区外へ延びる。SD-02は延長約9.5m、幅約0.5~0.8mで、南端は調査区外へ延びる。SD-03は延長約24m、幅約0.9~2.2mである。南北の両端はいずれも調査区外へ延びる。断面形態は、いずれもU字形ないし逆台形状を呈する。

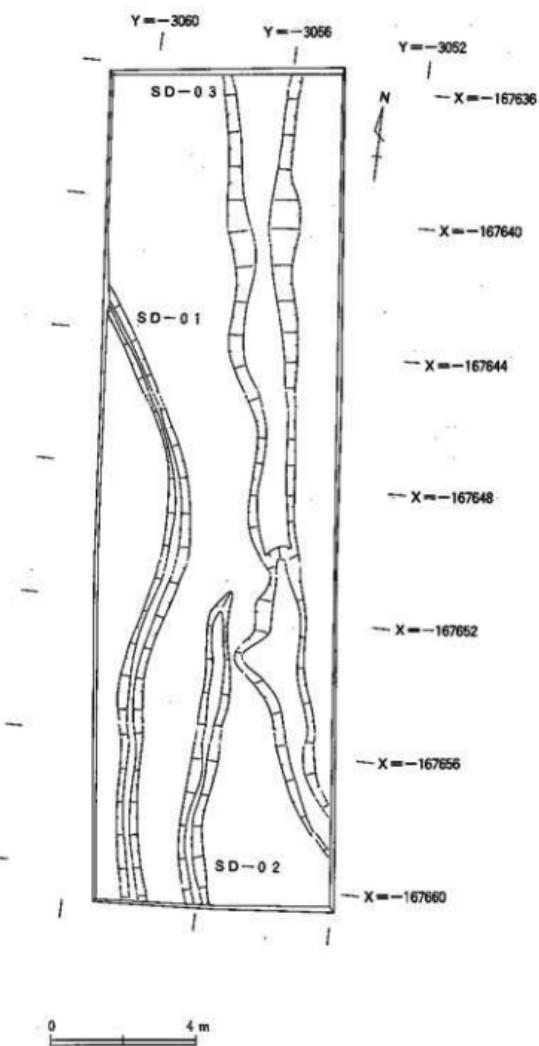


図14 沢遺跡第1遺構面平面図

## ②弥生時代の遺構

(図15、図版6)

第2遺構面において検出した溝、土坑である。SD-04は、延長約30mを検出している。検出北端から約3mのところで、溝はほぼ直角に東へ折れ、そして約5m東で溝は再び南へ折れるクランク状を呈している。幅は約0.8~1.1mあり、断面形態はV字状を呈する。溝内からは縄文土器とともに弥生時代中期(大和第Ⅲ様式)<sup>iii)</sup>の土器が出土している。SK-01は長径1.5m~短径1m、深さ約0.5mの楕円形土坑である。土坑内からは弥生土器細片が出土しているが、明確な時期は明らかでない。

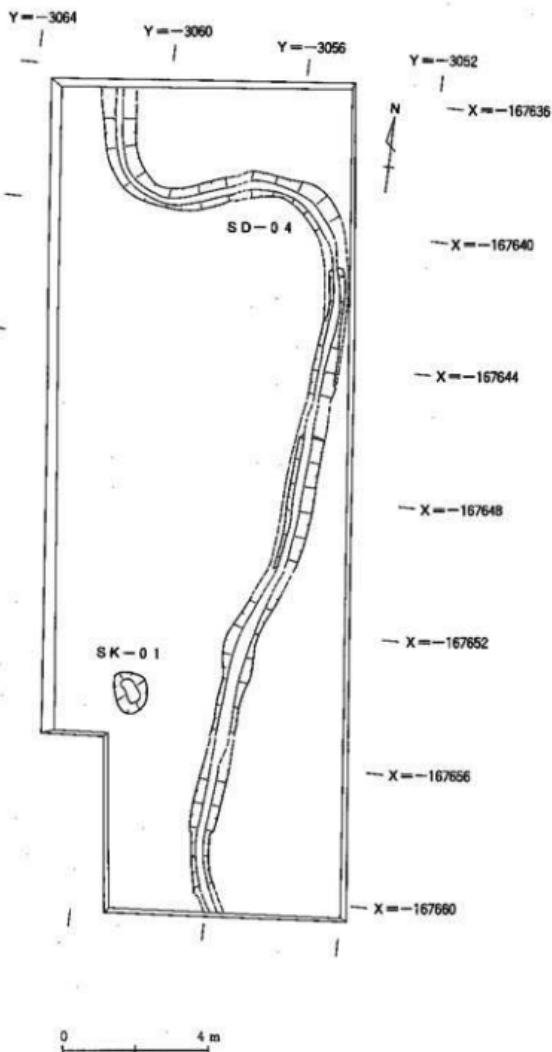


図15 沢遺跡第2遺構面平面図

③縄文時代後期の遺構（図16・17、表4、図版7～12）

第3遺構面において検出した土坑、埋壺（埋設土器）、ピット等である。SK-101は、径3.5m～3.8m、深さ約1mの大形土坑である。上層からは、多くの縄文土器片等が出土している。埋壺（埋設土器）は、5基（SX-01～05）を検出している。いずれも配石等の外部表象は認められない。また、一部において明赤褐色の焼土面が認められる。

縄文時代後期の遺構面は、遺構・遺物の検出状況から埋壺（埋設土器）検出面と焼土検出面の上下2面にわたることが考えられるが、上面での詳細を明らかにできなかった。図13の上層断面図ではNo.16・No.18間が上層遺構面、No.18・No.20間が下層遺構面となり、図16は下層遺構検出時の平面図である。

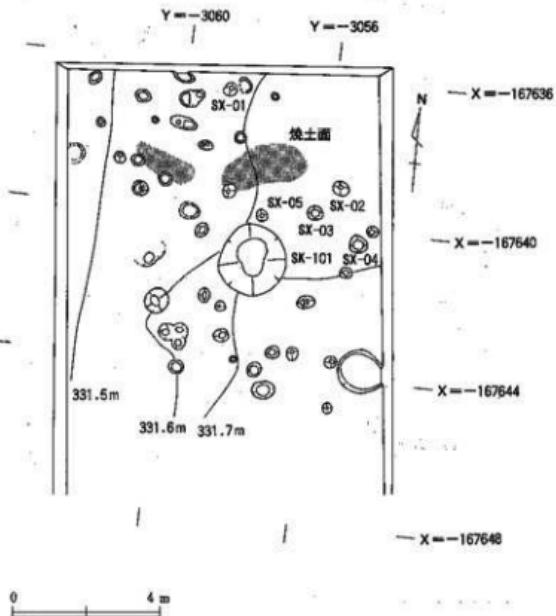


図16 沢遺跡第3遺構面平面図

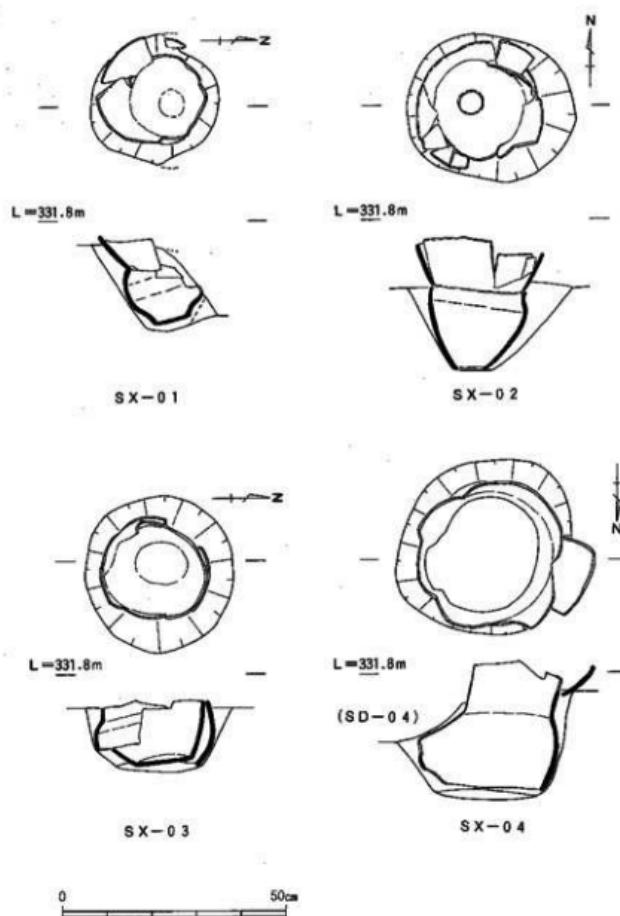


図17 沢遺跡埋設土器 (SK-01~04) 実測図

表4 埋甕(埋設土器)一覧表

遺構名	土坑形態	土坑規模(cm) (長径×短径×深さ)	埋設土器の 種類 埋設状態	土器の 欠損状態	土器内の埋土	その他
S X - 0 1	円形	35X-X23	深鉢 斜位	完形	暗灰黄色土	調査時に口縁部を欠損
S X - 0 2	円形	44X37X23	深鉢 正位	底部穿孔	にぶい黄褐色土	
S X - 0 3	円形	42X40X19	深鉢 正位	上半部打ち欠き	上層 暗褐色粘質土・炭 細片含む 下層 にぶい黄褐色粘質土	
S X - 0 4	円形	49X44X29	深鉢 正位	下半部打ち欠き	暗褐色土・炭細片含む	SD-04により一部破壊
S X - 0 5	円形?	34X-X16?	深鉢 正位	口縁部打ち欠き?		

## (3) 出土遺物

第3～4層からは弥生時代中期～後期の遺物が中心に出土しているのに対し、第5層からは縄文時代中期末～後期の遺物が多量に出土している。縄文時代の遺物としては、中期末～後期の縄文土

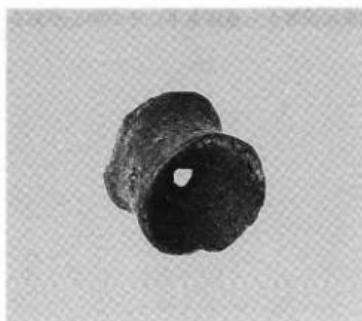


写真1 沢遺跡出土土製耳飾

器（深鉢、浅鉢、注口土器等）、石斧、石鎌、石槍、切目石錐、叩石、サヌカイト石核・剝片、土製耳飾などが認められる。弥生時代の遺物としては、中期～後期の弥生土器（壺、甕、高杯、鉢、水差等）、石鎌、石斧、石匙、石錐、サヌカイト石核・剝片等が認められる。この他、第1～2層からは、須恵器、土師器、瓦器、鐵釘、瑪瑙片が出土している。

土製耳飾は、宇陀地域では初出のものである。断面形態は、いわゆる滑車形を呈し、法量は外径2.3cm、厚さ1.7cmである。中央には径0.4cmの円孔が穿たれ、外面には全面にわたって赤色顔料が塗布されている（写真1）。

#### 4 ま と め

沢遺跡からは、第1次調査や採集資料等から縄文時代中期末葉から縄文時代晩期、弥生時代前期～後期の土器が出土している。なかでも縄文時代後期前葉、弥生時代中期（第Ⅲ様式）～弥生時代後期（第V様式）の土器が多く確認されていることから、この頃の遺構の存在を考えていたところである。

今回の発掘調査によって、先掲の遺物や溝、土坑、ピット、埋甕（埋設土器）等の遺構を確認することができたのは、大きな成果といえ、北半の基本土層は第1次調査時のものと類似していることが明らかとなった。

遺構・遺物の検出状況等から遺跡の盛期は、縄文時代後期前葉、弥生時代中期～後期の2時期と考えられ、芳野川流域の代表的な集落のひとつと推定される。なお、調査地の南半は弥生時代後期頃に沢集落から芳野川へと灌ぐ谷川の氾濫によるものと推定される砂が堆積している（図18）。住居跡は未確認ではあるが、遺構・遺物の検出状況及び地形から調査地東隣の標高333m付近と推定でき、今後の調査に期待するところが大きい。また、中世の遺構の存在も予想したが、これらを明らかにできなかった。遺物の散布状況等から遺跡東半にその中心があるとも考えられる。

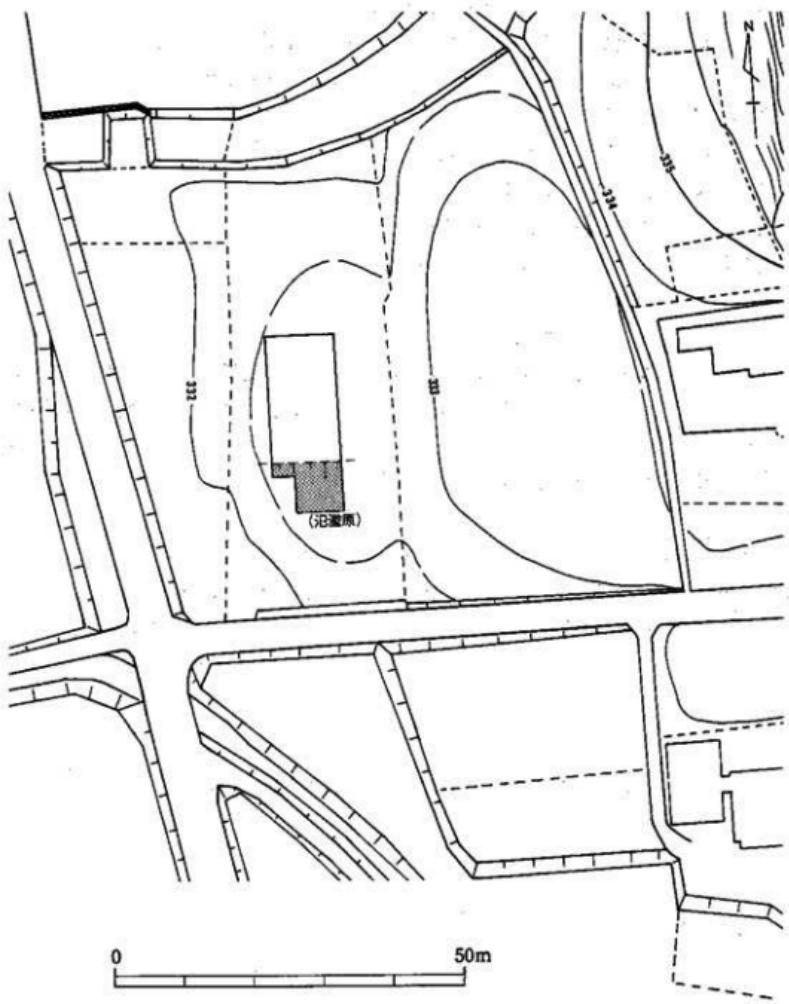


図18 沢遺跡第3造構面氾濫原推定図

## 5 抄 錄

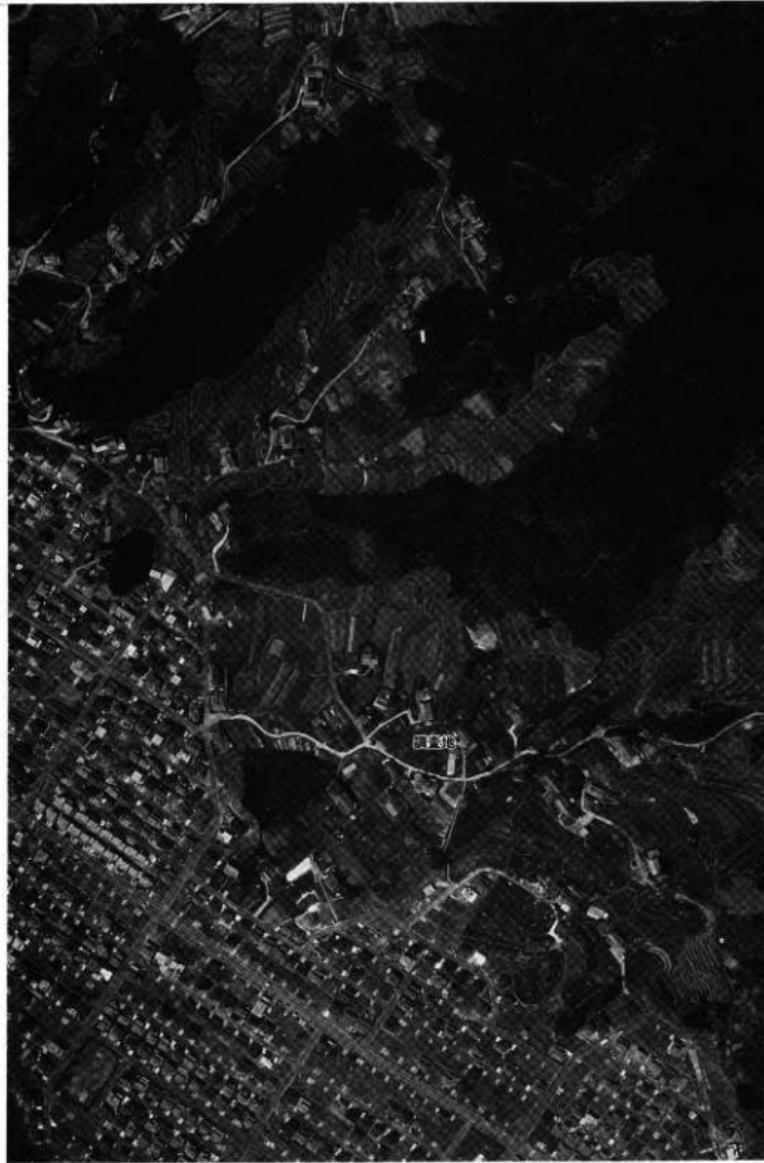
遺 跡 名	沢 遺 跡 (奈良県遺跡番号15-D-84、株原町遺跡番号 2-544)
調 査 地	奈良県宇陀郡株原町大字沢978-1番地 (小字名: 小倉前)
遺 跡 立 地	標高331.5~335.5mの河岸段丘、台地状の尾根先端
遺 跡 規 模	南北約130m、東西約150m
種 別	縄文時代~中世の遺物散布地・集落跡
調 査 主 体	株原町教育委員会
調 査 原 因	個人住宅及び倉庫建設工事
現地調査期間	1996年1月23日~1996年3月29日
調 査 面 積	215m <sup>2</sup>
検 出 遺 構	溝、土坑、埋甕、ピット
検 出 遺 物	縄文土器、石斧、石鎌、石槍、石匙、石錐、石錘、叩石、土製耳飾、石劍、サヌカイト石核・剝片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、鉄釘、瑪瑙片等
	— 整理箱 40 箱 —
資料等の保管	株原町教育委員会 (文化財整理室)

註 1) 藤田三郎・松本洋明「大和流域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 I 木耳社 1980

2) 囲崎晋明ほか『大和考古資料目録』第14集 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1987

3) 第1次調査担当者の小泉俊夫先生からご教示をいただいた。また、実測図の一部を当委員会が保管している。

# 図 版



航空写真（1981年撮影）

図版二  
額井兩門遺跡



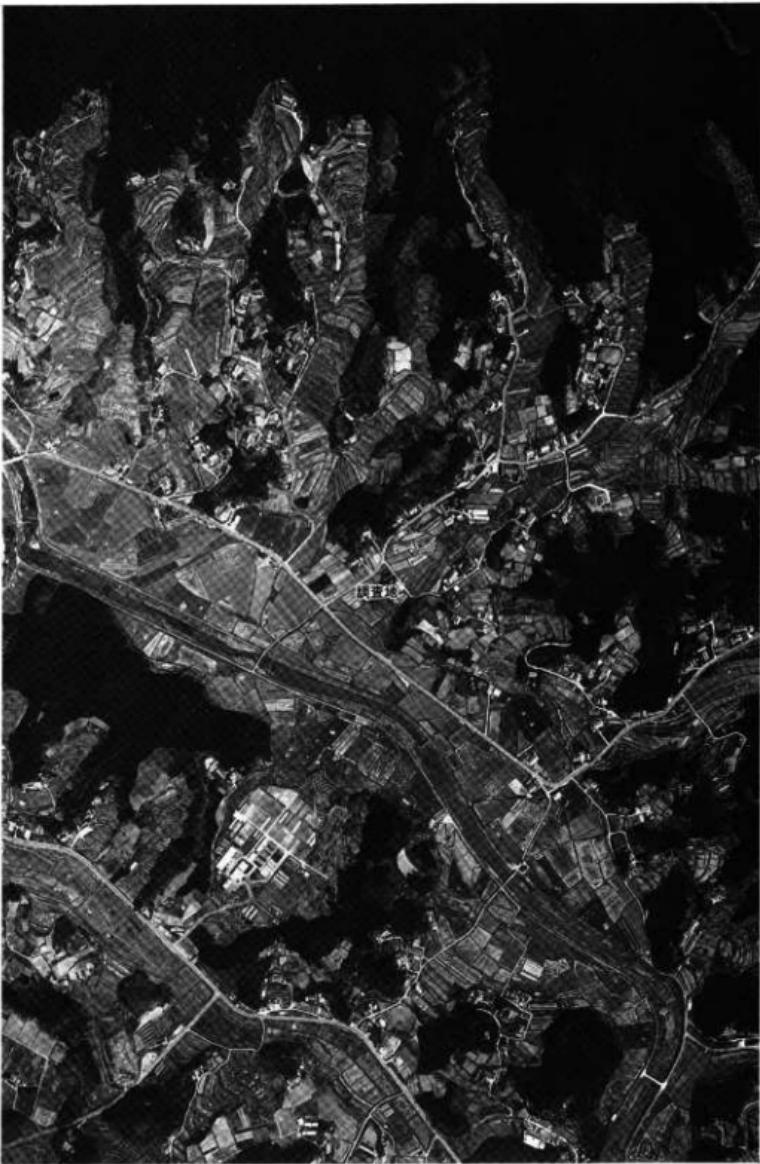
航空写真（1981年撮影）



調査区（南から）



調査区土層断面（南西から）



航空写真（1981年撮影）



航空写真（1981年撮影）

図版六

沢遺跡



航空写真（垂直）



第1・2遺構面（北から）



第3遺構面（南から）



第3遺構面埋甕（埋設土器）（東から）



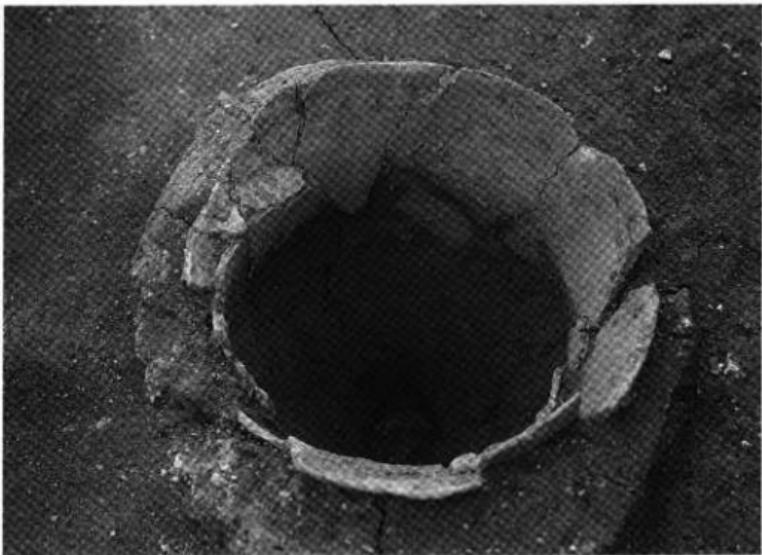
第5層遺物出土状況（北から）



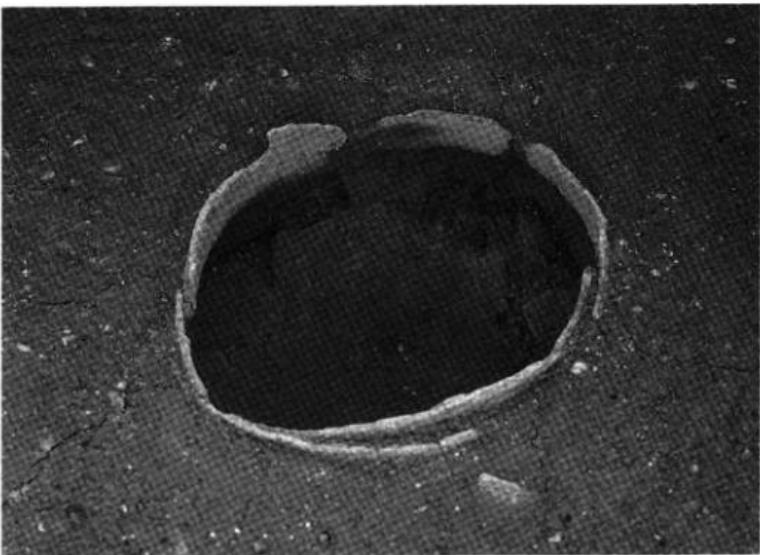
調査区北東部土層断面



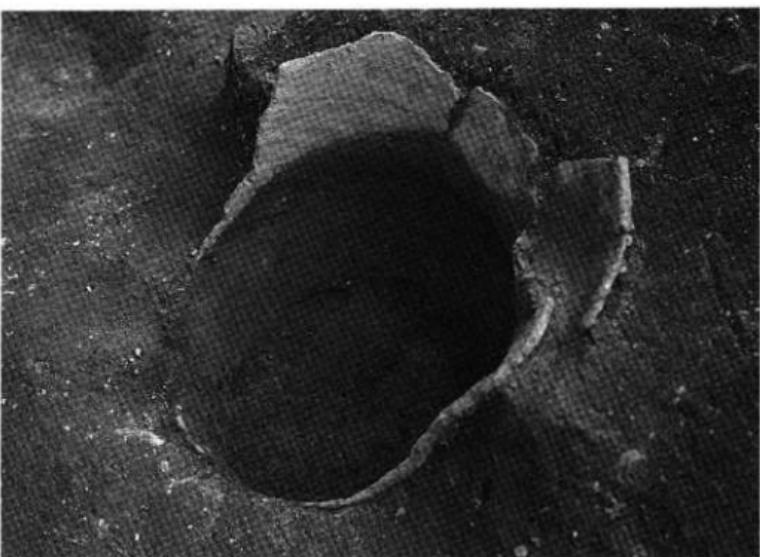
SX-01 (東から)



SX-02 (東から)



S X - 0 3 (北から)



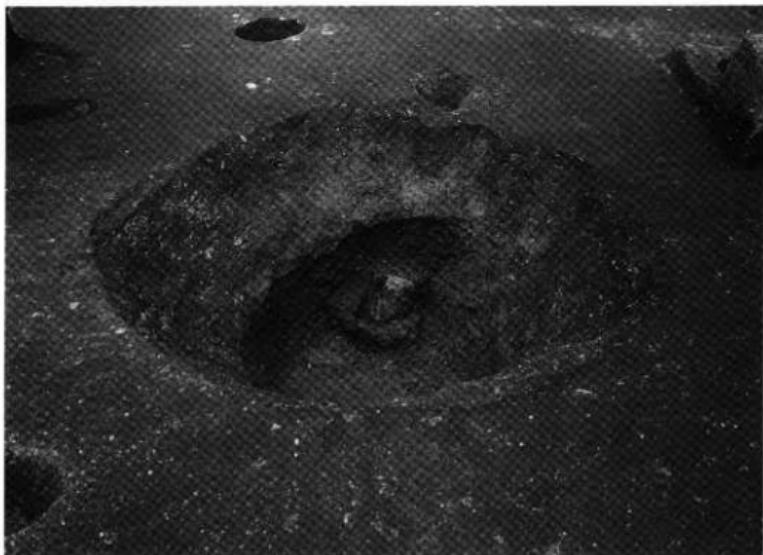
S X - 0 4 (北から)



SK-101周辺土層断面（南から）



SK-101上層遺物出土状況（南から）



SK-101 (南から)



SK-101 下層遺物出土状況 (南から)

## 報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	株原町内遺跡発掘調査概要報告書 1995年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	株原町文化財調査概要							
シリーズ番号	18							
編著者名	柳澤一宏							
編集機関	株原町教育委員会							
所在地	〒633-02 奈良県宇陀郡株原町大字萩原164番地 TEL 07458-2-1301							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
額井南遺跡	奈良県宇陀郡株原町 大字額井436-1番地	29383		34度 32分 42秒	135度 58分 29秒	1995.12.12 1995.12.26	8	個人農業用倉庫建設工事
沢遺跡	奈良県宇陀郡株原町 大字沢978-1番地	29383		34度 29分 19秒	135度 58分 02秒	1996.1.23 1996.3.29	215	個人住宅及び倉庫建設工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
額井南遺跡	遺物 敷布地	縄文時代～ 古墳時代、 中世	なし		サヌカイト片、須恵器、土師器、 瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、 鉄釘、鐵滓、鐵貨			
沢遺跡	遺物 敷布地 集落跡	縄文時代～ 中世	溝、土坑、埋甕(埋設土器)、ビット		縄文土器、石斧、石鎌、石槍、 石匙、石鑿、石鍬、叩石、土製耳飾、石劍、サヌカイト石核、 剝片、弥生土器、須恵器、土師器、 瓦器、鉄釘、瑪瑙片			縄文時代後期の良好な遺物包含層を確認し、周辺には遺構も認められる。

橿原町内遺跡発掘調査概要報告書 1995年度

橿原町文化財調査概要 18

1997年 3月31日 発行

編集  
発行 橿原町教育委員会  
奈良県宇陀郡橿原町萩原164番地

印刷 株式会社 中西文山堂  
奈良県橿原市今井町3丁目31-1